



偉人たちの シークレットレター

手紙は、はるか昔から自分の言葉、思いを相手に伝える方法として用いられてきた。
家族への近況報告、友人へ向けた気軽なものから、恋人へのあまい思いを綴った恋文…
季節の挨拶や冠婚葬祭など、手紙の万能性は、その歴史をひも解くだけでも多岐にわたる。
メールやSNSが主流の現代においても、手紙は私たちの日常生活に根付いている。
本特集では、歴史に登場する様々な偉人たちのエピソードとともに、彼ら、彼女らの手を通して綴られた「シークレットレター」をご紹介します。

文豪・太宰治

『人間失格』『走れメロス』などの名著で知られる太宰治（本名・津島修治^{つしましゆぢ}）は、1909（明治42）年、青森県北津軽郡金木村（現在の五所川原市）に生まれた。県会議員や衆議院議員を多く輩出する大地主の六男として、何不自由なく暮らした太宰の経歴は、異端と言わざるを得ない。

太宰治の作家への道は、中学生から始まった。兄・圭治が東京から持ち帰った文学雑誌に書かれた、井伏鱒二の『幽閉』（のちの『山椒魚』）や、芥川龍之介の『侏儒の言葉』に出会い、彼は衝撃を受ける。先人たちの作品に触発された太宰は、中学卒業までの四年間、兄弟や友人らとともに同人誌『星座』『青んぼ』を発刊し、会誌に自らの作品を発表するなど、意欲的に創作活動に励んだ。

そして高校生になった彼を待ち受けていたのが、敬愛してやまない作家・芥川龍之介の自殺だった。

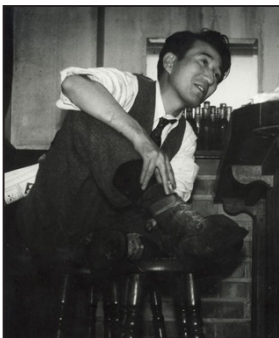
1927（昭和2）年7月24日、「将来に対する唯ぼんやりした不安」を動機に服毒自殺した芥川の死は、後の太宰自身、そして作風にも多大な影響を及ぼすこととなる。

1935（昭和10）年、芥川の友人で

ある菊池寛が、雑誌『文藝春秋』1934年4月号にて、芥川賞と直木賞の募集を開始する。芥川に傾倒していた太宰ももちろん参加。自信作の『道化の華』を芥川賞へ応募したが、結果は落選であった。

選考者である川端康成^{かわばたやすなり}は、太宰の応募作ではなく、太宰自身の私生活に問題があることを指摘しており、この選評に太宰は不満を爆発させた。「選考者ならばあくまで作品の質で判断すべきだ」と、不満と反論を綴った長文の手紙を川端へ送っている。

翌年、『晩年』が砂子屋書房から刊行された折り、太宰は初刊行本を川端へ寄贈した。それに対する川端の礼状の返事に、太宰は後に『泣訴状』と呼ばれる書簡を送っている。内容は、「次回の芥川賞はぜひ私に与えてほしい」旨を認めたものだったが、第二回芥川賞は二二六事件の影響で該当者なしで終わった。太宰の落胆は計り知れない。



▲1946（昭和21）年、銀座のBAR「ルパン」にて。太宰治。（林忠彦・撮影）

『ひまわり』の
画家・ゴッホ

名画『ひまわり』で有名な画家フィンセント・ヴィレム・ファン・ゴッホを一言で表すなら、苦悩の画家という言葉が思い浮かぶ。

1853年3月30日、オランダ南部にあるフロート・ズンデルトという村で彼は生まれた。フィンセントは、子供の頃から真面目で気難しく、扱いにくい性格をしていたようだ。社会に適合できないその気性ゆえに、学校も悉く中退し、親族の口利きで勤めることになった画廊も解雇されてしまう。最後は父と同じ聖職者の道を目指すものの、それすらも断念することになった。自身に対する不甲斐なさや失意の中、彼は27歳にしてはじめて画家への道を歩むことになる。

こんなどうしようもないフィンセントにも理解者はいた。4歳年下の実弟、テオドルス・ファン・ゴッホ（通称・テオ）である。彼は生涯に渡り、金銭的にも精神的にもフィンセントを支え続けた。

テオはグーピル商会という画商で働いており、取引先の絵具商を通じて、後にフィンセントとともに交流を持つことになるポール・ゴーガンと出会う。フィンセントは、オランダ、パリ時代を経て、南フランスのアルルへ辿り着き、後に「黄色い家」と呼ばれる画室を得て、制作活動に本腰を入れて取り組むことになる。ゴーガンもテオの誘いを受けて黄色い家

でフィンセントと共同生活を営むようになった。

フィンセントは、最初の頃はゴーガンとともに料理をしたりデッサンに誘ったりと親睦を深めていたようだが、この関係は後に破綻する。あの有名な「耳切り事件」だ。どういった経緯があったか定かではないが、フィンセントは何かをきっかけに自身の耳を切り落とし、精神病院に収容されることになる。



『ひまわり』フィンセント・ファン・ゴッホ（1888年）、油彩、92.1cm×73cm、ナショナル・ギャラリー、ロンドン

セザンヌの静物画「部屋をけし」は、フィンセントの「オランダの農民」に似ている。1888年5月、フィンセントはオランダの農民の生活を描いた。この絵は、フィンセントの代表作の一つで、オランダの農民の生活を描いた。この絵は、フィンセントの代表作の一つで、オランダの農民の生活を描いた。

フィンセントとテオが亡くなった後、テオの妻・ヨハンナは、フィンセントとテオのやり取りが綴られた手紙を編集し、1914年、オランダ語で書簡集としての発刊に尽力した。フィンセントがテオに宛てた手紙は実に60通を超え、他の家族や画家仲間宛に書かれたものを合わせた優に800通以上になる。

天才音楽家
モーツァルト

かの著名な音楽家であるヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトは、1756年1月27日ザルツブルグ（現在のオーストリア）に生を受けた。

ヴォルフガングは3歳からその才能をいかんなく発揮し、5歳の誕生日の時点で難易度の高い曲を一時間半で覚えたという。彼がいかに類まれな音楽の才能を持っていたかは、多数残された父・レオポルトの手記が物語っている。幼少期から既に天才と目されていた彼の才能を見出したのは、宮廷音楽家であり優秀な教育者でもある彼の父親・レオポルトだった。

レオポルトはヴォルフガングの才を愛し、音楽にのめり込む彼に最高の環境を与え続けた。その甲斐あってか、ヴォルフガングはヴァイオリンやチェンバロ、ヴィオラなど、ピアノ以外の楽器も巧みに弾きこなす名演奏家になり、弱冠5歳にして作曲もこなすまでに成長する。

天才の名をほしいままにするヴォルフガングは、同時にユーモアに富んだいたずらっ子の一面も持っていた。彼が家族や恋人たちへ送った書簡の中では、「おなら」や「お尻」などの、当時下品とされた単語を用いたおふざけ交じりの駄洒落を連発することもあった。

そんなちゃらんぼらんないイメージがあ

やり取りは、政宗が朝鮮滞在中に何度も行われた。

政宗の正室・愛姫との文通も知られている。豊臣秀吉が管理する京都・聚楽第に住まいを移してからも二人の手紙のやり取りは続き、その間、愛姫は京都の情勢を夫に伝える外交官のような役割もこなしていたそうだ。

二人の手紙は『枕草子』や『源氏物語』を引用した言い回しも多い。高尚な文章表現で互いの心象を伝え合うことが出来るほど、二人の中は睦まじかったと推測される。

❖ 酒の席で…

朝食に酒を飲むほど無類の酒好きと言われている政宗は、酒宴の際、ぐちぐちと言い訳を重ねる小姓（※身の回りの世話をする役職）の態度が気に障り、酔った勢いで脇差の鞘で頭を殴った挙句、自宅謹慎を命じてしまう。

その後、酔いが醒めた政宗は他の小姓経由で「昨夜はやりすぎた」と謝罪の手紙を認めたというエピソードがある。

その他にも、小姓達の髪形や格好に対して「最近の若い者は…」と言及するような手紙を書いている。

【参考文献】

今までの歴史を紐解くと、国内外問わずあらゆる偉人たちの「シークレットレター」が存在することが分かる。今回は有名所から選んでご紹介したが、それもなく一部に過ぎない。デジタル化が進むにつれ、自筆で手紙を書く機会も少なくなってきたかもしれないが、家にこもる時間が増えた今こそ、偉人たちに倣い、大切な人に手紙を送ってみてはいかがだろうか。

- ❖ 『手紙の歴史』（小松茂美／著、岩波書店 1977年、所蔵：中央）
- ❖ 『太宰治の手紙』（東郷克美／著、大修館書店、2009年、所蔵：中央）
- ❖ 『太宰治 生誕一〇〇年記念』（平凡社、2009年、所蔵：中央・上高田）
- ❖ 『川端康成 蒐められた日本の美』（羽鳥徹哉／監修、平凡社、2009年、所蔵：中央・野方・南台・上高田）
- ❖ 『伊達政宗 文化とその遺産』（小林清治／編、里文出版、1987年、所蔵中央）
- ❖ 『伊達政宗の研究』（小林清治／著、吉川弘文館、2017年、所蔵中央）
- ❖ 『心を動かす珠玉の「手紙」』（日本史研究会／編著、日本文芸社、2005年、所蔵：野方）
- ❖ 『ゴッホの地図帖』（ニーンケ・デーネカンフ／著、講談社、2016年、所蔵：中央）
- ❖ 『ファン・ゴッホ』（関府寺司／著、KADOKAWA、2019年、所蔵鷺宮）
- ❖ 『モーツァルトの人生』（シル・カンタグレル／著、西村書店、2017年、所蔵中央）

独眼竜・伊達政宗

独眼竜・伊達政宗を知らない人はなかなかない。1567（永禄10）年8月3日、伊達藤次郎政宗（幼名・梵天丸）は、出羽国（現在の山形県と秋田県）米沢城にて、伊達家第16代当主・伊達輝宗の嫡男として生を受けた。初代藩主として陸奥国に約60万石の城下を築いた政宗は、各時代、文化から良いところを抽出して、まったく新しい特色の文化を持つ仙台藩を作った。政宗は当時、文化の最先端を行く洒落者でもあり、無類の筆まめであったと言われている。

1636（寛永13）年5月24日、享年70歳でその生涯を閉じるまで、現存するだけで軽く数千を超える直筆の手紙を残している。当時は、祐筆と呼ばれる書状を代筆する役目を担う専属の文官を置くのが主流である中、これほどの数の直筆の文書が残っているのはめずらしい。このことから、政宗がいかに筆まめで



▶『伊達政宗（1567 - 1636）肖像画』土佐光貞（1738 - 1806）筆、東福寺・霊源院所蔵

あったかへえよう。『仙台市史 資料編10 伊達政宗文書1』（1994年刊行、所蔵：国立国会図書館、以下『政宗文書』）には、18歳から25歳の間、彼が認めた手紙が収録されている。政宗は、時と場合、儀礼と日常、または相手と自分との関係の相違によって手紙を器用に書き分けていた。その様子は、『政宗文書』からも読み取れる。さて、政宗とその母・義姫（出家後の院号・保春院）の確執は有名だろう。政宗は5歳の時に痲瘡（天然痘）を患い、一命は取り留めたものの後遺症で右目を失明した。醜くなった政宗を義姫は厭い、以降は次男の竺丸（伊達政道）を溺愛するようになる。1590（天正18）年、時の権力者・豊臣秀吉からの小田原攻めへの参加要請を政宗が無視した際、伊達家の将来を案じた義姫は実兄と共謀し政宗毒殺を企む。結局毒殺は失敗に終わったが、政宗は罰として主犯の義姫ではなく、彼女が溺愛する弟の政道に切腹を命じた。以後、二人の溝は決定的なものとなったとされている。しかし、その三年後、保春院は朝鮮に出兵した政宗へ和歌を添えた金子を送っている。それを受け取った政宗は「ひとたび拝み申したく念望にて候」と、もう一度会いたい旨を認めた手紙を返送している。二人のこのような母子としての手紙の